

たが、対象児のIQの分散は標準に比し大であった。

(10) 対象児のIQを八四以下(C)、八五～一一四(B)、一一五以上(A)、の三群に分けて、生下時体重、在胎期間、出産回数、母体の年令、妊娠中及び出産前後の疫病異常の有無などについて比較してみた。

その結果生下時体重二kg以下、在胎期間八カ月以下の未熟児の頻度は、C群で最高、ついでB群、A群の順序になっていた。しかし生下時体重二kg以下、または在胎期間八カ月未満でも知能指数正常またはそれ以上を示した者が多数みられていることから、未熟出産そのものは知能指数と直接の関係はないものと考えられ、未熟出産をもたらす或いは未熟児出産時に起りやすい異常がその後の発育に影響を及ぼす事が考えられる。

(大会抄録1—5頁)

## 幼児重症歯蝕症についての研究

日本体育短期大学 深田 英朗

小児歯蝕症の発生は益々その激しさを加える傾向が見られ、特に低年令層における発生と、重症歯蝕症の傾向は著しい。特に低年令層における場合は、終局的には歯冠の完全なる崩壊を来し、咀嚼く、発音などの著しい障害を招くことは勿論、応々にして継歯根端病巣の形成を容易にし、発育中の永久歯歯芽へ種々なる障害を与え、永久歯の発育不全、歯列不正の遠因をつくる。一方これら根端病巣は時として歯牙病巣感染症の成立をうながし、成長発育期の小児の健康をおびやかすおそれもあり、小児科学上重要な意味を持つものと思われる。

(1) 重症歯蝕症の定義 乳歯二〇歯全部がムシバに侵され、しかもその罹患タイプは急性汎汎性のものである。

(2) 重症歯蝕症の発現頻度 東京都内の五才の幼稚園々児について調査した結果、次のような成績を得た。

調査人員は六七七名で男子三五八名、女子三一九名である。そして男子は三五八名中一五人の発現で四・一九%±一・〇五、女子は三一九名中一三名で四・〇七%±一・一〇であった。なお *Marginal Caries* を *Caries* の罹患型を無視し、乳歯列二〇歯全部が歯蝕であるという定義づけをして調査した結果、昭和二六年においては五才児は男〇・九四%±〇・二五、女一・〇〇%±〇・二七、また昭和三二年の成績では五才児において男一〇・九九%±二・三二、女一一・四一%±二・三四であると報告している。なお参考のために、私の調査した三才から六才までの五一〇名小児に発生した歯蝕の罹患型名を報告すると次の通りである。

単乳型三一・九六% 輪狀型一〇・三九% 広範型四七・四五% 慢性型〇・七六% 重症型五・一〇%(ムシバなし四・三一%)

(3) 重症歯蝕症小児の調査成績 調査対象は三五年四月より三六年四月までの日本大学小児歯科外来患者の重症歯蝕症のもの二〇名である(男子九名、女子一一名)。なお年令は次に示す通りである。

三才四名 四才四名 五才五名 六才五名 七才一名 八才〇才一名 九才一名

調査はこれら小児の既応症、食生活、発育状態について行なった。

(1) 既応症に関する調査 次の八項目について調査

(a) 生下時体重。これは平均二八五〇gで一応平均に近い。なお

二五〇g以下のものは二〇名中五名であったが、そのうち男一名女四名である。

(b) 授乳法。授乳の点では人工一〇名母乳六名混四名であった。

(c) 悪阻について。悪阻の状態を四段階にわけた。すなわち、殆んどないもの(一)、多少あったもの(十)、中程度のもの(廿)、激しかったもの(卅)である。その結果は

(一) 七名 (十) 二名 (廿) 三名 (卅) 八名 計二〇名

比較的母体の悪阻が強かったものが多い。

(d) 妊娠中の母体の健否と罹患した疾患二〇名中一七名はなんら疾患におかされることなく健康であり、その他流感一名、たんのう炎一名、薬物中毒一名であった。

(e) 出産状態。二〇名中正常一五名、異状五名で、そのうち早産三名、帝王切開一名、仮死一名である。

(f) 歯の崩出時期。二〇名中正常一三名、早期一名、晩萌六名、なお七カ月を平均とし十一カ月を正常とした。

(g) 乳幼児期の疾患とその罹患傾向。なし 四名 扁桃腺

炎 四名 麻疹 五名 水痘 二名 猩紅熱 一名

百日咳 二名 ストロフルス 三名 インフルエンザ 四

名 気管支炎 一名 肺炎 二名 自家中毒 一名

皮膚病 一名 喘息 二名

なお一般に度々風邪をひき易いと訴えている。

(h) アレルギー傾向 二〇名中一一名が有していた。

(2) 食生活に関する調査

(a) 食欲については二〇名中一六名が食欲不振を訴えている。

(b) 偏食調査では二〇名中、肉類を好まぬ者四名、魚類を好まぬ者四名、野菜を好まぬ者五名であった。なおニンジン、ネギ、ハム

とか、一品だけ好まぬというものは偏食に入れなかった。また半数ちかくのものが、歯ごたえのあるものを特に嫌がる傾向があった。これは歯の悪いということに深い関係があると思われる。

(c) 間食については与え方、量、質などについて調査した。その結果、与え方は殆んどが不規則で、また量は一般に多い。なお質については殆んど全員がキャンデー類を中心にした甘いものを特に好む。

(3) 発育状態について

身長、体重の測定により一応調査した。その結果、体重が平均値内にあるものが三名で、平均より低いものが一七名であった。また身長は平均値内のものが四名で、平均より低いものが一六名である。以上の結果から重症馮飭症と発育との間には明らかな関係があるように思われる。

(大会抄録5-7頁)

## 幼児の健康管理に関する研究

(第二報) 幼児と食物

浦和・木間幼稚園 和田 桜子

研究目的 この研究は終日保育する保育所を中心として給食とおやつをしらべ、更に家庭で食事をとる幼児のそれとを比較検討した。

研究方法と成果

I 幼児の好きな食物と嫌いな食物の調査：調査方法は④直接幼児から、⑤保育所、幼稚園を通して家庭から(アンケート用紙による)⑥、施設の担当者から資料を集めた。七種に分類した食品群中嫌いな食品は、魚介類二七種、肉類十一種、豆類十八種、野菜類三〇種、海草類六種、乳類四種、卵類七種でその主なものは野菜類、魚類。食品としては、人参、ゴボウ、貝、レバー、寒天、チーズ、粉乳などである。嫌いな理由として、魚：生ぐさい。骨がある。か